



## 著者プロフィール

千葉皓史（ちば・こうし）

昭和22年東京生まれ。早大卒。

「泉」石田勝彦、綾部仁喜に師事。

昭和60年「泉賞」受賞。

同人誌「夏至」創刊に参加。『現代俳句ニューウェイブ』（共著）。句集『郊外』で平成3年度俳人協会新人賞受賞。

俳人協会会員。

〈句集『家族』より転載〉（2023年5月時点）

## 『家族』（自選15句）

千葉 皓史

敲いてはのし歩いては畳替  
枯菊の沈んでゆける炎かな  
幼子の遊びくらせる二月かな  
雪解風そのとき母を失ひぬ  
ひとつこと済みたるものの芽なりけり  
みづろみにみづあつまれる紫雲英かな  
菜の花を挿す亡き者に近々と  
波音のどすんとありし雛かな  
明易き森の中なる灯がともり  
遠国の石を配せる牡丹かな  
萍のうごかぬ水の減りにけり  
いづこへか下る石段夜の秋  
はなびらの間のひろき野菊かな  
秋晴の眺め置かるる一日あり  
青空の光つてゐたる秋の暮